

## 西ゲルマン語重子音化について

森 基 雄

### 序

ゲルマン語派のなかの西ゲルマン諸語を特徴づける音変化の一つに重子音化 (Gemination) がある。これは母音 (通常は短母音) プラス一つの子音に共鳴子音 *j*, *w*, *r*, *l* という弱い子音 プラス母音が後続するという結合において, その *j*, *w*, *r*, *l* の前の子音が長化されるという現象である (例えば \**satjan* > \**sattjan* > OE *settan*, OS *settian*)。本稿ではこの重子音化の原因と実際のその具体的な起こり方について, 例を挙げながら歴史的に論じていくことにしたい。

### 第1章 重子音化とその原因

重子音化の原因についての最近特に注目すべき見解は, 音節構造と子音強度に着目した Murray & Vennemann (1983) の研究に見られる。

Murray & Vennemann (1983 : 518) はゲルマン祖語の単一語における音節区分の原則を次のように説明している。

If, in a simplex word, a group of marginal segments occurs between two nuclear segments, the first of which is short and stressed, then the cluster is divided in such a way that only the first segment belongs to the first syllable.

これは \**sat<sup>s</sup>ja*, \**sun<sup>s</sup>ja*, \**al<sup>s</sup>ja*, \**ap<sup>s</sup>la*, \**bin<sup>s</sup>dja* という音節構造を意味する (<sup>s</sup>は音節境界を表わす)。さらに Murray & Vennemann (1983 : 520) は, 音節境界をはさんで隣接する二つの子音の強度によって, その音節構造が好まれ維持されやすいか, それとも変化しやすいかが決まるとしており, 彼らはこのことを音節接触の原則 (Syllable Contact Law, SCL) と呼んで次のように説明している。

The preference for a syllabic structure  $A^sB$ , where  $A$  and  $B$  are marginal segments and  $a$  and  $b$  are the Consonantal Strength values of  $A$  and  $B$  respectively, increases with the value of  $b$  minus  $a$ .

そして重子音化はこの原則に対する大きな違反を修復するための音過程の一つなのである。すなわち重子音化により、 $A^*B$  が  $A^*AB$  (例えば  $C^*j$  が  $C^*Cj$ ) となって、音節境界をはさんで隣接していた二つの子音の強度の差がなくなることにより、SCL に対する大きな違反が修復されたのである。逆に言えば、 $a$  マイナス  $b$  の値が大きければ大きいほどそれだけ音節構造  $A^*B$  は変化しやすいということになる。

Murray (1986 : 334) によると、子音強度の数値は次のとおりである。

$i$	$\underline{u}$	$r$	$l$	$N$	$\mathfrak{D}$	$\mathfrak{P}$ $D$	$T$
1	2	3	4	5	6	7	8

$N$ は鼻音、 $\mathfrak{D}$ は有声摩擦音、 $\mathfrak{P}$ は無声摩擦音、 $D$ は有声閉鎖音、 $T$ は無声閉鎖音を意味する(なお本稿では  $i, \underline{u}$  はそれぞれ  $j, w$  と表記する)。従って重子音化を最も引き起こしやすい後続子音は共鳴子音の中でも最も弱い  $j$  であり、重子音化はこの  $j$  によるものが最も一般的であった。

まず後続の  $j$  による重子音化の例を、音節境界をはさんで隣接する二つの子音の強度値の差(後続子音の強度値マイナス先行子音のそれ)の変化とともに見てみよう。

$T^*j(-7) > T^*Tj(0)$  : Go. skapjan, OE scieppan, OS skeppian 'to create' ; Go. satjan, OE settan, OS settian 'to set' ; Go. us-wakjan, OE weccan, OS wekkian 'to arouse'

$\mathfrak{P}^*j(-6) > \mathfrak{P}^*\mathfrak{P}j(0)$  : Go. hafjan, OS heffian, OHG heffen 'to raise' ; Go. skaþjan, OE scepþan 'to injure' ; Go. hlahjan, OE hliehhan, OHG hlahhen 'to laugh' ; Go. us-hrisjan 'to shake out', OE hrissan, OS hrissian 'to shake'

$\mathfrak{D}^*j(-5) > \mathfrak{D}^*Dj(0)$  : Go. sibja, OE sibb, OS, OHG sibbia 'relationship' ; OI biðia, OE biddan, OS biddian 'to ask' ; Go. lagjan, OE lecgan, OS leggian 'to lay'

$N^*j(-4)N > N^*Nj(0)$  : OI fremia, OE fremman, OS fremmian 'to do' ; OI venia, OE wennan, OS wennian 'to accustom'

$l^*j(-3) > l^*lj(0)$  : Go. saljan, OE sellan, OS sellian 'to sell'

$r^*j(-2) > r^*rj(0)$  : Go. nasjan, OE, OS nerian, OHG nerien, nerren 'to save'

$r$  の重子音化が起こっていない、あるいは起こったとしても古高地ドイツ語においてのみで、それも不規則にしか起こっていないのは、 $r$  が他の子音に比べて強度値が低いため SCL への違反も小さかったからであろう。他方、例えば OE sēcan, OS sōkian 'to seek' ; OE liesan, OS lōsian 'to set free' ; OE fēdan, OS fōdian 'to feed' ; OE dēman, OS dōmian 'to judge' ; OE hǣlan, OS hēlian 'to heal' のように語根母音が長母音であるものに重子音化が起こっていないのは、その音節構造が  $\bar{V}^*CjV$ 、あるいはゾーフェルスの法則 (Sievers'

Law) の結果を保持する  $\bar{V}^sCi^sjV$  であったために SCL への違反とはなっていなかったからであろう。

また前述のように、重子音化は j よりも強い共鳴子音 w, r, l によっても引き起こされた。

$T^sw(-6) > T^sTw(0)$ : Go. naqaþs, OHG nackot ‘naked’

$T^sr(-5) > T^sTr(0)$ : Go. snutrs, OE snottor, OS, OHG snottar ‘wise’ <Gmc.  
\*snutra-

$T^sl(-4) > T^sTl(0)$ : OI epli, OE æppel, OS appul ‘apple’

$\mathfrak{p}^sr(-4) > \mathfrak{p}^s\mathfrak{p}r(0)$ : Gk. dákru, OE tæhhres (属格単数) ‘tear’

$\mathfrak{p}^sl(-3) > \mathfrak{p}^s\mathfrak{p}l(0)$ : Gk. kúklos, OE hweohhol ‘wheel’

なお方言によっては後に長母音の後でも重子音化の起こっている場合がある。まず j による重子音化の場合、古高地ドイツ語のなかでも上部ドイツ語において leitten (OS lēdian) ‘to lead’; auckan (Go. augjan) ‘to show’ などが例証される。これらは  $\bar{V}CjV$  が  $\bar{V}^sCjV$  ではなく  $\bar{V}C^sjV$  と解釈されたまれな例であったと言えるであろう。また r による重子音化も見られる ( $\bar{V}C^s rV > \bar{V}C^s CrV$ )。その例としては OE hluttor (hlūtor), OS hluttar, OHG hlūtтар (Go. hlūtrs) ‘pure, clear’; OE attor (ātor), OS ettar, OHG eittar (OI eitr) ‘poison’; OE blæddre (blædre) ‘bladder’; OE næddre (nædre) ‘adder’; OE moddor (mōdor) ‘mother’ などがあり、古高地ドイツ語以外の方言では語根母音の短化を伴った。

## 第2章 wj > wwj は容認可能か？

西ゲルマン語では w にもまた後続の j による重子音化が起こったとされている (Wright & Wright 1925<sup>3</sup>: 52; Campbell 1959: 46)。しかし Murray によれば w は r よりさらに弱い子音であることから、少なくともイングヴィオニックにはこの見解は実際には当てはまらないと思われるのであるが、一応その w の重子音化の例とされるものを取り上げてみたい。Campbell はまず Gmc. awj については Gmc. awj > WGmc. awwj > auwj > OE ēg, ieg (後者は後に ig となる) という音過程を考える。

- ① OE hēg, hīg, OS hōi, OHG hewi, houwi (Go. hawi, OI hey) ‘hay’, さらに与格単数では OE hēge, hiege (Go. hauja)
- ② OE strēgan, OHG strewen, strouwen ‘to strew’, 過去形では OE strewede (Go. strawida)
- ③ OHG zewen, zouwen ‘bereiten’ (Go. taujan ‘to do, make’, 過去形では Go. tawida)
- ④ OE frīgea, OS frōio (Go. frauja) ‘lord, master’

⑤OE *træg*, *trīg* ‘tray’

⑥OE *ēg*, *ieġ* ‘island’, OHG *ouwa* ‘Aue’ (OI *ey* ‘island’)

⑦OE *hēgan* (OI *heyia*) ‘to exalt’

⑧OE *ċiegan*, *ċēgan*, OHG *gikewen* ‘to call’

Campbell はまた、弱変化動詞第1類の OE *ēwan*, *iewan* ‘to show’ のような形もあることから、Gmc. *awj* > WGmc. *awwj* > *auwj* > OE *ēw*, *iew* という別の発達もあったとしているが、なぜこのように別々の発達が生じたかについては何も説明していない。

次に Gmc. *ewj*, *iwj* > WGmc. *iwwj* > *iuwj* (> OE *iow*, *iew*) とされる例を見てみよう。

⑨OE *niowe*, *niewe*, OS, OHG *niuwi* (Go. *niujis*, OI *nýr*) ‘new’ < Gmc. \**newja-*, \**neuja-*?  
(Skt. *návya-*, Lith. *naūjas*)

⑩OE *gliow*, *gliw*, *glig* (OI *glý*) ‘mirth’, 属格単数では OE *gliowes*, *gliwes*, *gliges* <  
Gmc. \**glewja-*, \**gleuja-*?

⑪OE *hiow*, *hiew* (Go. *hiwi*) ‘shape, appearance’ < Gmc. \**hiwja-*, \**hiuja-*?

まず Gmc. *awj* とされる場合についてであるが、第一にこれはゴート語では *auj* であることから、ゲルマン祖語では *awj* ではなく *auj* であったのではないだろうか。現に①, ⑤, ⑥の古英語形に対しては Watkins (1985 : 1, 12, 27) が、また⑧のそれに対しては Holthausen (1974<sup>3</sup> : 47) が、そして Campbell (1959 : 164, 322) でさえもがはっきりと *auj* を仮定している。すなわち OE *ēg*, *ieġ* という音結合は Gmc. *awj* > WGmc. *awwj* > *auwj* > OE *ēg*, *ieġ* ではなく、むしろ Gmc. *auj* > WGmc. *auj* > POE *ēaj* > OE *ēg*, *ieġ* という音過程を経てきたものと思われるのであり、wの重子音化を反映するものとは考えにくい。WGmc. *awwj* ならば WGmc. *auwj* > POE *ēawj* > OE *ēw*, *iew* となっていたはずである。また OS *hōi*, *frōio* の *ōi* はまさに *auj* の反映そのものなのであり、古サクソン語では WGmc. *awwj* は *ōi* ではなく *auwi* となっていたであろう。現に例えば Gmc. \**hawwanan* ‘to hew’ は WGmc. \**hawwan* > \**hauwan* > OE *hēawan*, OS *hauwan*, OHG *houwan* (OI *hōggva*) となっているのである。

ただし OE *ēg*, *ieġ*, OS *ōi*, そして本当の重子音化形と見られる OHG *ouwi* という音結合は jの後のゲルマン祖語から母音を保持した西ゲルマン語形に由来するものと思われる。すなわち中性 ja-語幹名詞の主格・対格単数である①OE *hēg*, *hig*, OS *hōi*, 実際に重子音化による *ww* を反映すると見られる OHG *houwi*; ⑤OE *træg*, *trīg* の場合、西ゲルマン語の段階で重子音化に先立って語根後位置の jの後の Gmc. *-an* (<IE *-om*) が消失していたとされていることから、これらは各々 Gmc. \**haujan* > WGmc. \**hawi* (Go. *hawi*) > OE \**hewe*,

OS \*hewi, OHG hewi; Gmc. \*traujan > WGmc. \*trawi > OE \*trewe となるのが本来の発達であろう (Wright & Wright 1925<sup>3</sup>: 145; Campbell 1959: 231)。従って①, ⑤の古英語形, OS hōi, OHG houwi は元来は主格・対格単数以外の, j の後の母音を保持した屈折形からの類推によるものであろう。

そしてイングヴィオニックとは異なり, 確かに古高地ドイツ語では, 非重子音化形を反映する ew のほか, Gmc. aw が重子音化によって Gmc. aww の反映 ouw と融合しているのが見られるのであるが, 何よりもまず, 古高地ドイツ語だけがなぜか auj ではなく, u の子音化によるものと思われる awj を前提としている点が異色である。この弱い子音 w の重子音化は, 古高地ドイツ語においてのみ弱い子音 r の重子音化が不規則ながらも起こっているという事実と同様に, 古高地ドイツ語における SCL の方言的な独自性によるものではないだろうか。

また Campbell が Gmc. awj > WGmc. awwj > auwj は ēg, ieg となるだけではなく ēw, iew となることもあるという例として挙げた OE ēwan, iewan こそが WGmc. awwj の反映と同一なのであるが, この WGmc. awwj は重子音化の結果ではなくそのまま Gmc. awwj に由来するのかもしれない。従ってもし①から⑧までの古英語の例が元来 Gmc. awj という音結合に由来し, またその w が本当に西ゲルマン語の重子音化を受けたのであれば, それらの語はすべて ēg, ieg ではなく, ēwan, iewan の場合と同じ ēw, iew となっていたはずである。しかし ēwan, iewan は語根 IE \*ok<sup>w</sup>-‘to see’ (>Gmc. \*ag<sup>w</sup>->\*aw-) に由来するとされていることから, それは Gmc. awwj ではなく, やはり Gmc. awj に由来することになる。従って ēwan, iewan を重子音化とは無関係に Gmc. awj から導き出す方法としては, その語の活用における屈折形の間での類推による混同が起こったと考える以外にないであろう。そしてその場合, 語根母音 ē, ie を説明するには, 古高地ドイツ語とは逆に awj における w の母音化が起こったと考えざるをえないであろう (現に⑥の OE ēg, ieg ‘island’ <\*aujō は IE \*ak<sup>w</sup>ā ‘water’ と同根の Gmc. \*ag<sup>w</sup>jō > awjō における w の母音化を反映していると考えられるのである)。すなわち auj, awi の両形が前提となると思われるのであり, 語根母音 ē, ie は \*auja- に, そして w は (\*auji-, \*awi->) \*awi- (直説法現在単数の 2 人称と 3 人称, 命令法単数, 過去形, 過去分詞) に由来し, この両者間での類推による混同の結果, OE ēwan, iewan という形が生じたのであろう。

次に Gmc. ewj, iwj > WGmc. iwwj > iuwj (>OE iowe, iewe, OS, OHG iuwi) とされる場合について考えてみよう。前記⑨, ⑩, ⑪の語もまた Gmc. ww の反映と同形であるため, w の重子音化を反映しているかのように見える。現に例えば Gmc. \*trewjaz ‘true’ は OE triewe, OS, OHG triuwi (Go. triggws, OI tryggr) となっているのである。しかし w の重子音化を本当に反映していると考えられるのは awj の場合と同じく古高地ドイツ語のみであり, SCL に従うならば⑨の古英語形と古サクソン語形, ⑩と⑪の古英語形が重子音化の反映であるとは考えにくい。

まず⑨の古英語形と古サクソン語形で男性形の場合、Go. *niujis* という形から判断して、それはゲルマン祖語では \**newjaz* ではなく \**neujaz* であったと思われる。現に⑨、そして⑩に対しても Watkins (1985 : 21, 45) ははっきりと *euj* という形を仮定している。古英語と古サクソン語において、Gmc. *auj* の *u* の子音化がなかった一方で Gmc. *euj* の場合にのみ古高地ドイツ語と同じく重子音化の前提となる *u* の子音化が起こったとは考えにくい。また⑨の主格単数では、\**newjaz* も \**neujaz* も *j* の後の *-az* (<IE *-os*) の、重子音化に先立つ消失によって WGmc. \**newi*>\**niwi* となるのが本来の発達のはずである。従って⑨の OHG *niuwi* は前記①の OHG *houwi* と同じく、*j* の後の母音が西ゲルマン語においても消失しなかったために実際に重子音化を引き起こしたと考えられる、主格単数以外の形が基礎になっているにちがいない。Dal (1934 : 245) によれば、古サクソン語では現に本来の主格単数形と思われる (\**niwi*>) *nī* という形も例証されるのである。また Sievers & Brunner (1965 : 114) によると、古英語では *nīg(e)* という形も見られるのであり、これは *j* の後に母音を保持した、主格単数以外の形 (\**niu<sub>j</sub>*->\**nio<sub>j</sub>*->\**nīe<sub>j</sub>*-) の方を反映するものと思われる。従って OE *nīowe*, *nīewe* の *īo*, *īe*, OS *niuwi* の *iu* は主格単数以外の形に由来するが、*w* は主格単数 \**niwi* 本来のものであろう。すなわち OE *nīewe*, *nīowe*, OS *niuwi* は *w* の重子音化を反映するものではなく、このように主格単数とそれ以外の形との間での類推による混同の結果であると考えられるのである。

同様のことは⑩、⑪の語の長母音 *īo*, *īe*, *ī* についても言えるのであり、⑩のように *w* と *g* に終わる二重形が生じているのもやはり類推による混同の結果であろう。

### 第3章 Converse of Sievers' Law と重子音化

*ja-*, *jō-*語幹の名詞・形容詞と並び、弱変化動詞第1類、そして強変化動詞のなかの *j-* 現在動詞 (*j-present*) の現在形もまた *j* による重子音化を示す良い例であり、これらはまとめて *j-* 動詞と呼んでよいであろう。

ゲルマン語の *j-* 動詞の現在形の語根に後続する基底の /*j*/ は、印欧祖語にさかのぼれば大体次のように分類される：①そのまま IE *j* に由来するもの；②IE *ij* に由来するもの；③IE *ej* に由来するもの。①に由来するものは少数であり、例えば OE *byċgan*, Go. *bugjan* 'to buy'；OE *wyrċan*, Go. *waurkjan* 'to work' のように第1類のなかでも *j* なしに、従って北・西ゲルマン語では *i-* ウムラウトなしに過去形と過去分詞を形成するもの、そして同じく *j* なしに過去形と過去分詞を形成する、例えば OE *sittan*, OI *sitia* 'to sit'；OE *scieppan*, Go. *skapjan* 'to create' のような *j-* 現在動詞がある。そしてこれらにおいて *j* は重語根の後ではゾーフェルスの法則 (Sievers' Law) によって *ij* となったが、軽語根の後ではそのままであった。すなわち語根の音量によって *j* と *ij* の交替が生じたのである。

同じ交替は②においても生じ、*ij* は重語根の後ではそのままであったが、軽語根の後では逆

に j の前の i が削除されたと考えられる。軽語根の後での i のこの削除は、重語根の後でのズィーフェルスの法則による i の挿入とは逆の働きであることから、Converse of Sievers' Law と呼ばれる。

そしてゲルマン祖語において強勢が語根に固定されると、③では語根に後続する ej の e はすべて無強勢となったため i に上げられた結果、ej は ij となり、やはりこれも軽語根の後では Converse を被ったものと思われる (Lehmann 1955 : 361 ; Fullerton 1977 : 7-8)。

このようにしてゲルマン祖語では Converse によって表層ではすべて語根の音量による j と ij の交替へと変わったのである。そしてこの j と ij は基底ではすべて /j/ と解釈されたために重語根の後の ij (<IE j, ij, ej) はすべて、印欧祖語から引き継がれたズィーフェルスの法則による、/j/ からの派生によるものとなった。この ij の証拠は例えば、j-動詞の Go. *dōmeis*, OE *dōmir* 'you judge' <Gmc. \**dōmijizi* < \**dōmjizi* ; ja-語幹名詞の Go. *andeis*, OE *ende* 'end' <Gmc. \**andijaz* < \**andjaz* に残る。また原始ノルド語では ij がそのまま保持されているのが見られる。

以上のようにして、ゲルマン語の j-動詞という一つの屈折型が成立することになる。しかし重語根に後続する ij も後には軽語根形の場合と同じ j となった。その結果、西ゲルマン語においては語根の音量の違いが今度は後の重子音化の有無へとつながることになる。

しかし Converse をゲルマン祖語における純粹に音声的な規則として認めない学者もいる。例えば Marchand (1956) は、この Converse による結果のように見えるものは実は①のものへの形態上の類推の結果にすぎないとしている。しかし②と③のものを合計した数の ij-動詞が①のような少数派への類推によって変化したとは考えにくい。

Erdmann (1972 : 409-10) は Marchand の見解を支持し、Converse を否定する証拠としては、古英語の男性 i-語幹名詞の軽語根形で \**dani*-'Dane', \**wini*-'friend' の属格複数 *Deni(g)a*, *wini(g)(e)a* という形を挙げており、彼はこれらの形が \**dan-ij-ō*, \**win-ij-ō* という Converse を被っていない本来の形を思わせるものであるとしている。なおこの場合の ij は i が渡り音化を受けた結果である。そして彼は、逆にもし Converse が働いたのであれば、\**dan-ij-ō*, \**win-ij-ō* は \**dan-j-ō*, \**win-j-ō* となり、さらに j による重子音化とその j の消失により、OE \**denna*, \**winna* となっていたはずであるとしている。確かにこの二つの形は軽語根の後の ij を反映するものと考えられる。しかしこれはゲルマン祖語においていったんは Converse を被っていたかもしれない。そして j-動詞とは異なり、i-語幹名詞では、ij がたとえ Converse を被っていったんは表層では j となっていたとしても、表層のその j は基底では /j/ とはならず、あくまでも i-語幹としての連結母音である /i/ のままであり続けたと考えられるのである。これには、/i/ がゲルマン祖語では表層で何の変化も被ることのなかった単数の主格、呼格、対格の接辞 (Gmc. *-iz*, *-i*, *-in*)、そして複数の対格、与格の接辞 (Gmc. *-inz*, *-imiz*) からの影響があったと思われる。後に Converse という規則が消失し、表層での Con-

verse による音声上の制約がなくなると、再び /i/ は属格複数では表層においては、Converse による結果音が Converse の導入よりも前の時代のもとの渡り音化のみによる結果音 ij に戻り、また重子音化の段階になってもこの ij がそのまま維持されていたのである。従って Erdmann の挙げた i- 語幹形が Converse を否定する確かな証拠となるとは考えにくい。

また Murray (1988 : 256) の挙げているゴート語の i- 語幹名詞の軽語根形の主格複数の例も Converse を否定する決定的証拠となるとは断定しにくい。この点についてはすでに森 (1989 : 136) において論じた。

従って前記の②と③に由来する j- 動詞の軽語根形が西ゲルマン語において重子音化を引き起こす音節構造となるに至ったのは、①のものに対する類推の結果ではなく、すべて Converse of Sievers' Law という規則による結果であると考えられるのである。

#### 第 4 章 j-動詞の活用における重子音化の有無

重子音化の代表例と言える弱変化動詞第 1 類においても重子音化は、①直説法現在単数の 2 人称と 3 人称 (OE fremest, fremep), ②命令法単数 (OE freme), ③過去形と過去分詞 (OE fremede, fremeð) には起こっていない。①の場合、例えば Gmc. \*framjizi (Go. -jis) > WGmc. \*framis > OE fremest のように、j が i (<IE e) の前では重子音化に先立って消失していたからである。②の場合、Gmc. \*framje > WGmc. \*frami > OE freme のように、j に後続する末尾の IE e が非常に早期に消失していたために j が重子音化に先立って母音化されていたからである。そして③の場合、j が子音間で母音化されていたからである。

また j- 動詞では、重子音化の入力が有声摩擦音であった場合には重子音化によって、単にその子音が倍化されただけでなく、重子音化は閉鎖音化を伴ったため (⊕\*j > D\*Dj), 同じ一つの動詞の活用の内部で WGmc. bb ~ b̥, gg ~ g という重複閉鎖音と単一摩擦音との交替が生じた。それは例えば OE swebban 'to kill' と swefede 'he killed', lecgan 'to lay' と legest 'you lay' との間に反映されている。ただしもとの有声摩擦音でも歯音の場合には、例えば OE biddan 'to ask', bide (命令法単数) のように、WGmc. dd ~ d という重子音化の有無のみの交替しか現れていない。それは西ゲルマン語では Gmc. ð が重子音化とは無関係にすべて閉鎖音化されたからである。

#### 第 5 章 OE hebban と OHG heffen

Gmc. f は fj という結合において、古英語では例えば OS heffian, OHG heffen 'to raise' (Go. hafjan 'to raise', Lat. capiō 'I take, seize') のように重子音化の場合に普通予想される WGmc. ffj > OE ff とはならず、OE hebban のように有声音の bbj > bb となっている。これは Gmc. b̥j の反映と同一である。またさらに奇妙なことに古サクソン語にあっては、heffian, hebbian という二つの形が見られるのである。しかしこの場合の OE bb, OS bbj



は同語源の Go. *hafjan*, OHG *heffen* から見て, Peeters (1973) の主張する *bj* を本来反映するものとは考えにくい。また Peeters は, *hebban* の *bb* は *bj* に由来すると述べているだけで, *fj* が *bj* に取って代わられている原因については何も説明していない。

この OE *bb* はヴェルネルの法則による *b* (<*f*) が重子音化に先立って現在形へ類推的に導入されたことによるものであるという見方もできるかもしれない。*hebban* は強変化動詞第 6 類に属し, 強変化動詞全体に言えるように, この第 6 類においてももちろん過去形と過去分詞の語根末子音はヴェルネルの法則による有声化を受けた。*hebban* の場合は過去形が *hōf*, *hōfon*, 過去分詞は *hæfen*, *hafen* のように, Gmc. *f* と *b* が融合してしまったためにヴェルネルの法則によるもとの Gmc. *f* と *b* という違いは失われているが (同じことは古サクソン語にも言える), 古高地ドイツ語では現に過去形が *huob*, *huobun*, 過去分詞が *gi-haban* というようにそれははっきりと反映されている。従って *hebban* は重子音化の入力として過去形や過去分詞の *b* を類推的に導入した結果かもしれない。しかし古英語ではそのような類推の傾向は同じ第 6 類の他の動詞には見られないことから, それが *hebban* の場合にのみ適用されたとは考えにくい。同じことは OS *hebbian* にも言える。もしこのように類推という見方が正しくないならば, *hebban* は容認し難い Gmc. *fj* > OE *bb* という変化の唯一の例ということになり, 非重子音形の直説法現在単数の 2 人称と 3 人称, 命令法単数における *f*[*v*] もまた Gmc. *b* ではなく Gmc. *f* の方を反映しているということになる。

このように事態があいまいであるせいか, Moulton (1972: 169) も Gmc. \**hafjanan* のイングヴィオニックにおける本来の正確な発達形については答えを差し控えている。

あるいは OE *hebban* は, *fj* において有声音間の *f* が古英語における有声化により *v* となった後に重子音化が働いた結果なのかもしれない。すなわち古英語において有声音間での *f* の *v* への有声化が起こった後は, 重子音化の入力もそれまでの *f* から *v* となり, その *v* が重子音化を受けた結果, 閉鎖音化した重子音 *bb* として現れたのかもしれない (同様のことは OS *hebbian* についても言えるかもしれない)。従って古英語においても有声音間での有声化が起こる前の, 文献時代より前の時代においては, 重子音化の入力は *f*, そしてその重子音化による結果音も OS *heffian*, OHG *heffen* の場合と同じ *ff* となっていたのかもしれない。

いずれにせよ, 同じ無声摩擦音でも Gmc. *p*, *s* は *þj*, *sj* という結合においては一般に予想されるとおり OE *sceþpan*, *hrissan* のように無声音のまま重子音化されているという事実を考えれば, 古英語では重子音化の入力としては *f* のみが有声化を反映しているというのはやはりきわめて特異な現象であると言わざるをえないであろう。

## 結 論

1) 西ゲルマン語重子音化の原因についてはこれまでなかなか決定的な説が提出されていなかったが, Murray & Vennemann (1983) の研究は, 単一語の音節構造と各子音の強度を明

らかにしたうえで、音節接触の原則 (Syllable Contact Law, SCL) によって、重子音化の原因と同時に *r* の重子音化の欠如の原因をも説明可能にしている。SCL に従えば、*r* より弱い子音 *w* の従来主張されている重子音化は、*r* のような弱い子音の重子音化を不規則ながらも示す古高地ドイツ語に対してのみ初めて容認可能なのであり、*r* の重子音化の起こらない古英語と古サクソン語では容認不可能であろう。しかも古英語において *awj* (>*ēg*, *ieġ*) という結合での重子音化の例として従来挙げられている語の語根末音は古高地ドイツ語とは異なり、実は *w* ではなく *u* であったと考えられる。他方、OE *ēwan*, *iewan* は、そして *ewj*, *iwj* という音結合での *w* の重子音化の例として従来挙げられている語形は、その語の活用における交替形の間での類推による混同の結果であろう。

2) ゲルマン祖語においてゾーフェルスの法則 (Sievers' Law) とその Converse は純粹に音声的な規則として働いていたと考えられるのであり、Marchand の主張する、第3章に挙げた①のような少数派の動詞形への類推があったとは考えにくい。Erdmann が挙げている古英語の男性 *i*-語幹名詞の軽語根形の属格複数の場合、(/*i*/>) *ij* がたとえ表層では Converse を被っていったんは *j* となっていたとしても、*j*-動詞の場合とは異なり、表層のその *j* は基底ではあくまでも *i*-語幹としての連結母音である /*i*/ のままであり続けたものと思われる。そしてこの属格複数における *ij* は、Converse がやがて消失し働かなくなった後は Converse による結果音 *j* が Converse の導入よりも前の時代のもとの渡り音化のみによる結果音 *ij* に戻るといった結果を反映していると考えられるのである。そして Converse は②と③に属した軽語根形における語根末子音を重子音化へと導くことになったのである。

3) 最後に OE *hebban* の *bb* について考えたが、これは同源語の Go. *hafjan*, OHG *heffen* から見て、Gmc. *bj* ではなく Gmc. *fj* に由来するものと思われる。またもとのこの Gmc. *fj* がヴェルネルの法則による *bj* に取って代られたと見るべき理由も見当たらないようである。従ってこの有声音 *bb* は *fj* における *f* の古英語での有声音間における *v* への有声化に原因があるとしか考えられないであろう。すなわち *f* は、古英語でも有声音間で有声化が起こる前の早期の段階では、重子音化規則が働いても表層では OS *heffian*, OHG *heffen* の場合と同じく *ff* となっていたと思われるが、*f* が後に有声音間での *v* への有声化を受けるとなると、重子音化の入力もそれまでの *f* から有声音 *v* に変わったため、表層での結果としての重子音もそれまでの *ff* から有声音 *bb* に変わったと考えざるをえないようである。

## 参 考 文 献

- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1977<sup>14</sup>. *Abriss der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.  
 Campbell, A. 1959. *Old English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.  
 Dal, I. 1934. "Zur Geschichte der *ja*-Stämme im Westgermanischen." *NTS* 7, 243-52.  
 de Vries, J. 1977<sup>2</sup>. *Altnordisches etymologisches Wörterbuch*. Leiden: Brill.  
 Erdmann, P. H. 1972. "Suffixal *j* in Germanic." *Lg.* 48, 407-15.  
 Fullerton, G. L. 1977. *Historical Germanic Verb Morphology*. Berlin, New York: de Gruyter.

- Holthausen, F. 1974<sup>3</sup>. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Lehmann, W. P. 1955. "The Proto-Indo-European Resonants in Germanic." *Lg.* 31, 355-66.
- Marchand, J. W. 1956. "The 'Converse of Sievers' Law' and the Germanic First-Class Weak Verbs." *Lg.* 32, 285-7.
- 森 基雄. 1989. 「古英語弱変化動詞第1類の起源と発達について」『奈良産業大学紀要』第5集, 131-43.
- Moulton, W. G. 1972 "The Proto-Germanic Non-syllabics (Consonants)." *Toward a Grammar of Proto-Germanic* (F. van Coetsem & H. L. Kufner, eds.), 142-73. Tübingen: Niemeyer.
- Murray, R. W. 1986. "Urgermanische Silbenstruktur und die westgermanische Konsonantengemination." *PBB* 108, 333-56.
- Murray, R. W. 1988. *Phonological Strength and Early Germanic Syllable Structure*. München: Fink.
- Murray, R. W. & T. Vennemann. 1983. "Sound Change and Syllable Structure in Germanic Phonology." *Lg.* 59, 514-28.
- Peeters, C. 1973. "A Note on the West Germanic Gemination." *Linguistics* 98, 65-7.
- Ramat, P. 1969. *Grammatica dell'antico sassone*. Milano: Mursia.
- Sievers, E. & K. Brunner 1965<sup>3</sup>. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Watkins, C. 1985. *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*. Boston: Houghton Mifflin.
- Wright, J. 1910. *Grammar of the Gothic Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925<sup>3</sup>. *Old English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.